

「わたしのもとに来なさい」という小標題が掲げられます。この箇所は次の三つに区切ることが出来ます。

①神への感謝の祈り(25-26)

②父を知る者と子を知る者(27)

③イエスの軛への招き(28-30)

これらは元来別々の伝承から編集されています。まず、①と②はルカ10;21-22にもありますが③はありません。ですから③はマタイが独自にQ資料以外から入手した伝承であることが分かります。次に特徴的なのは、①は神への直接的な呼び掛けの祈りですが、②は父と子の関係についての解説であって神は第三者的に記されています。つまり、①と②では翻訳した日本語がおかしいというより、原文でも神への視点が変更されているのです。多分、①の解説文として②は後に付け加えられたのでしょう。③では視点がさらに一転し、イエスが信仰者に語りかける言葉になっています。これらのことからこの三つの部分はそれぞれが異なる背景を持っていることが分かります。

①の25-26節には原文ではアラム語の語調が強く残っているので、実際のイエスの言葉、つまりは古い伝承だと考えられます。ここに記載される「知恵ある者や賢い者には隠して」という思想、つまり神が知識を賢者には隠して、反対に弱く・小さく・貧しい者に与えたというのはすでに旧約の昔から

たくさん語られています。さらには新約でもパウロがキリストにおける啓示は知者や賢者に隠されていると述べています(1コリ1;18-28)。こうした啓示思想の共通背景はユダヤ教の知恵思想でした。ですから、本日の箇所におけるマタイの言葉もこのような共通地盤において形成されているのです。

③の28-30節も知恵思想に立っています。「わたしのそばに来なさい。無学な者たちよ。学舎で時を過ぎなさい。軛の下にお前の首を置き、魂に教訓を教

え込め。知恵はすぐ身近にある。目を開いて見よ。わずかな努力で、わたしが多くの安らぎを見いだしたことを。」(シラ51;23以下)という知恵文学を基にしているのです。マタイはこれらの知恵理解を引き継ぎました。既に彼は19節でイエスとは神の知恵であると語りました。そこで、その線上に立ってユダヤ教知恵文学で擬人化された知恵が与えるという「軛」をイエスが与えるのだと述べるのです。そして、知恵が賢い者には隠され、そうでない者に優先的に与えられたという記述は、実は当時のファリサイ派や律法学者といったユダヤ教指導層への強い批判なのです。28節の「重荷」とは生活の疲れや罪の悩みではなく、ファリサイ派が人々に押し付ける厳格な律法解釈のことです。マタイはここでイエスのまったく新しい「軛」を提案するのです。

物事を正しく見るためにはどこから出発したら良いのでしょうか。自分勝手な判断を差し控え、先入観を取り除くことからでしょうか。そうではありません。物事を見定めようとしている自分が、既に多くの物事に包まれ、それら物事と共に、物事に支えられて生きているのです。そのことを自覚することから出発すべきでしょう。つまり、物事を利用する相手として見ないこと、包んでくれている支え手として見る事。これがマタイの提案する「軛」なのです。軛とは人を苦痛に満ちた窒息状態に追いやるものではありません。わたしたちの贖いのために十字架に架かれたイエスの愛ゆえの自由であるとマタイは示唆するのです。